

ポスト・ヒューマン時代の政治的想像力、 あるいはアイロニカルな神話

—ダナ・ハラウェイの「サイボーグ宣言」を読む その(2)—

副島 美由紀

1. はじめに

ダナ・ハラウェイの命名による〈サイボーグ・ポリティクス〉がどのような政治的意識の提唱なのかを理解するため、本誌前号では、現代、特に80年代以降に対するハラウェイの認識を紹介することから始めた。端的に言って、彼女の見る現代の位相は、「ポスト・ヒューマン時代」という概念で捉えることができるだろう。ひとつには科学とテクノロジーがもたらした、人間／動物、物質／非物質、機械／人間などの境界融合によって、またひとつにはポストモダンのパラダイムによって、西欧的な男性原理を核とした主体神話が崩壊を始め、二重の意味において「人間＝男性」中心主義が終焉を迎えつつある。この境界融合の時代にこそ、従来の社会関係に根を持つ「人種」「階級」「性差」といった対立を溶解に向かわしめるような契機が含まれていないか、それらの対立の解消に向けての意識改革が可能にならないものか、それが社会学者ハラウェイの問いかけであった。

科学とテクノロジーがもたらした、マン＝マシーン共生系とも呼び得る境界融合の領域は、多くのサイバネティック・デバイスを可能にする一方で、当然新たな危険性をも孕んでいる。テクノバイオポリティクスが作りあげる新たな枠組みは、スター・ウォーズ級のアクション計画から生体の部品化にいたるまで、マイクロ・チップ上の可視的ならざる力によって現実組織を統御しかねない。C³-Iの戦略に代表されるようなこの力学を、ハラウェイは「支配の情報工学」と名づけ、新たな統合・抑圧・境界画定を生み出す

ものとして大いに警戒を促している。

そこで彼女は〈サイボーグ主体〉および〈サイボーグ・ジェンダー〉という概念を持ち出す。それは、女性の非在性を逆手に取ったアイロニーから生まれ、無垢なる原初といった概念やひとつの統一した同^{アイデンティティ}一性に拠らない、ポストモダン的な主体意識・ジェンダー意識である。サイボーグ・ポリティクスは、支配の情報工学の裏をかき、西欧的人間＝男性原理による神話を解体するモザイク状のネットワークを作るための、意識改革の戦略なのである。

本号では、特に「サイボーグ宣言」⁽¹⁾のフェミニズム理論としての側面に焦点をあて、〈サイボーグ・フェミニズム〉とは何か、そしてそれはどのような指針をわれわれに示してくれるのかを考察してみたい。

2. 「集積回路内部の女性」と、モデルとしての有色人女性

「支配の情報工学」における女性特有の布置を捉えるため、ハラウェイはレイチェル・グロスマン⁽²⁾が提供した「集積回路内部の女性」というイメージを使い、現在の女性がいかに科学とテクノロジーの社会関係により構築された世界に置かれているか、その状況を名づけようとしている。ところが、前号でも指摘したとおり、「女性」というのは歴史的に構築された複合カテゴリーにすぎない。ひとたびそれを認識すると、「女性」の炸裂したアイデンティティをどうしても意識せざるを得なくなる。「わたしたち」という主語はいたい誰をさすのか。女性間、フェミニスト間における激越な核分裂を経たあと、女性概念はいまや流動化している。ハラウェイ自身を例にとるなら、彼

(1) Haraway, Donna. "A Manifest for Cyborgs: Science, Technology, and Socialist Feminism in the 1980s" in Elisabeth Weed, ed, *coming to Terms: Feminism, Theory, Politics* (New York: Routledge, 1989)ダナ・ハラウェイ「サイボーグ・宣言」小谷真理訳、異孝之編、『サイボーグ・フェミニズム』トレヴィール、1992、以下、ハラウェイ論文(日本語訳)からの引用は、()内の頁数で、また原著からの引用は[]内の頁数で本文中に記す。

(2) Rachel, Grossman, "Woman's Place in the Integrated Circuit", *Radical America*, Vol.14, No.1. (1980) pp.29-50.

女は、白人女性の中産階級職業婦人で、政治的過激派で、北米に住む中年という条件を他と共有できるにすぎない。女性たちの相互支配という事態を避けるためには、分裂を繰り返しながら新たな本質的理念を探究するより別の対応があるのではないかとハラウェイは問いかける。同一性^{アイデンティティ}ではなく親和力^{アフィニティ}を重視する連体の方法である。

例えばシーラ・サンドーヴルは、ひとつのモデルを設定するため、「闘争意識」という名の政治的主体を想定しようとする⁽³⁾。人種・性差・階級といった社会的カテゴリーにおいて確固たる一員の資格を与えられなかった者たちはみな、権力網を読みとるための技術を培ったはずであり、「闘争意識」を共有していたはずである。そのような意識のもとに彼らがどのような歴史的事件をくぐりぬけ、政治的発言力を得ていくのか、特にサンドーヴルは「有色人女性」というモデルを設定してその点を考察しようとした。その際サンドーヴルが強調するのは、いったい誰を「有色人女性」として同定すべきなのか、そのためのいかなる本質的尺度も存在していないという事実である。彼女によれば、このような集団を設定したのは、まさに否定の理論を意識的に乱用した結果である(47) [180]。

ジョンス・ホプキンス大学のアフロ・アメリカン文学講座を担当するバーバラ・ジョンソンも、かの有名な「女性と黒人」という一大被抑圧者カテゴリーの中に実は黒人女性が含まれないという事実を指摘している⁽⁴⁾。「女性」というのは白人女性を、「黒人」は黒人男性を主体として想定させるため、黒人女性は、白人原理からも男性原理からも不可視の存在なのである。このように考えていくと、例えばアメリカのメキシコ系黒人の場合、「女性」というカテゴリー、「黒人」なるカテゴリー、「メキシコ人」なるカテゴリーのすべ

(3) Chela Sandoval, "Dis-illusionment and the Poetry of the Futur: The Making of Oppositional Consciousness." 1984年、カリフォルニア大学サンタクルス校における博士号(Ph. D)取得資格審査論文として提出された。

(4) バーバラ・ジョンソン『差異の世界』大橋洋一他訳、紀伊国屋書店、1990、293頁。

てから不可視であり、かくして有色人女性としての彼女は否定的アイデンティティの多重構造の中でも最下位に位置することになる。このような女性には、特権的な個別的主体が与えられていないばかりか、カテゴリーとしての単一性も持ち合わせない。その歴史的主体の背景には大きな差異が広がっている。よってそこにはなんらかの自然化された母型を想定する必要がないのである。

この「有色人女性」という概念は、考察されるやいなやこの名称で示される女性たちの猛反発を食らったものの、同時にそれは名称ならぬひとつの歴史的意識として、西欧的伝統における男性＝人間の痕跡を葬り去る可能性を持っている。彼女たちは、白人男性のモデルから最も遠く、その主体神話からは最も自由な身である。つまり、ハラウェイの言うサイボーグに最も近似した存在なのである。「有色人女性こそ、他者性と差異性をふまえてポストモダンの人間主体を構築する。そしてこのような主体のありかたこそは、その政治性におけるかぎり、他のありうべきポストモダニズム様式の追随を許さない(47) [180]。」

有色人女性たちがアイデンティティではなく親和力によって共通の理念を樹立できるとしたら、それはフェミニストたちにとってひとつの有力な言説を与えるだろう。それは、「「西欧」とその最高の産物を——動物でもなければ野蛮人でもなく、女性でもない存在であり、歴史と呼ばれる宇宙を構築する者、すなわち男性＝人間を——溶解せしめるような言説(48) [180]」となるだろう。それこそ闘争意識の力が独自にもたらす力と言ってもかまうまい。そのような親和力はどのようにして模索すべきなのだろうか。サイボーグ・モデルとしての有色人女性が集積回路内部に占める位置について考察することにより、われわれがどのように闘争意識を共有しているのか、確認できる筈である。

3. 集積回路内の七つの空間と《労働力の女性化》

支配の情報工学における集積回路というヴィジョン獲得のため、ハラウェイは〈家族〉〈市場〉〈有給職場〉〈国家〉〈学校〉〈医院・病院〉〈教会〉とい

う七つの空間に焦点を絞り、女性の「場所」のあり様を探ろうとしている。その際彼女はそれぞれの空間に起こっていると見られる変化を指摘しているが、これらの空間のうち、ハラウェイが最大の関心を寄せているのが、〈有給職場〉である。科学とテクノロジーがどのように現実構造を変革しているのかは、特に経済的現実の変化をふまえて語られねばならないが、とりわけ有色人女性をモデルとした女性の布置をみると、いわゆる労働市場で近年起こっているのは、最大級の変化だからである。この変化がその他の空間に及ぼす波及効果は大きい。そしてその特徴は、《労働力の女性化(femisation)》と呼ばれる現象だと言えるだろう。この現象はいまや世界的規模で進行しており、特に80年代後半になって、現状の包括的な把握の必要性が指摘され始め、様々な視点による問題提起がなされるようになった。ハラウェイも、この問題把握のために多くのエネルギーを費やし、集積回路内の女性の布置を捉える分析の中心に据えている。特に彼女は、後に詳述するように「ホームワーク・エコノミー」というキーワードを使い、独自の視点から家族構造の変化をももたらしかねないこの現象全体を概観しようとしている。が、まず《労働力の女性化》という現象とその問題点を確認してみたい。

《労働力の女性化》とは、厳密に言えば、《労働力の女性化》それ自体（労働力人口に占める女性労働者の増加と労働形態の多様化）と、《雇用の女性化》（女性雇用者の増加）という二つの局面を名付けて言う概念である。が、いずれにせよ、経済のグローバル化と経済のサービス化という、経済の再構築の二つの側面を背景にして、60年代より徐々に進行してきたものである。徐々にとは言っても、それは確実に世界の労働市場における画期的な変化をもたらしている。二つの背景のうち、経済のグローバル化だけに目を向けてみても、資本の国際化、新しい国際分業の展開、世界労働市場の形成などの諸側面は、「現代を世界経済の新たな段階と規定するのに十分な要因である⁽⁵⁾」と

(5) 森田桐郎・木前利秋「資本の国際化・新国際分業・世界労働市場(1)」東京大学経済学会『経済学論集』56巻2号(1990年7月号)2頁。

まで言われている。ハラウェイもこの段階を、新しいテクノロジーに由来する「新たなる産業革命」と呼び、資本主義の三大主要段階の最後に位置づけている。ハラウェイの図式によれば、世界経済の発展史とイデオロギーや家族形態の変遷との関連は、以下のとおりである。

資本主義の発展段階 支配的イデオロギー 支配的美学 家族形態	初期産業資本主義 民族主義 リアリズム 家父長制核家族	独占資本主義 帝国主義 モダニズム 近代家族	多国籍資本主義 多国籍主義 ポストモダニズム ホームワーク・エコノミーの家族
---	--------------------------------------	---------------------------------	---

「ホームワーク・エコノミーの家族」とハラウェイが名づける家族形態は、やや不明確ではあるが、その極端な例は、「女性を首長とし一夫一婦制を継続するも、やがて男性が逃走して老女ばかりになりかねない空間(82) [194]」である。ではなぜそのような事態の生来が予想されるのか、順を追って考えてみたい。

経済のグローバル化という側面から見た場合、《労働力の女性化》という現象はまず資本の多国籍化による新しい国際分業の展開から起こっている。特に70年代初頭の中心部資本主義の貯蓄の危機以来、大企業が複数国へプラントを設置することにより、従来中心部に集中していた製造工業が、周辺部へ移転されるようになった。この状況は、NIDL (the New International Division of Labour) という概念で定式化されているが、この生産過程の再配置により、移転先での安価な労働力市場が開拓されることになり、熟練度を要しない理想的な現業労働力として、「有色人女性」、つまり第三世界の女性が《再発見》されることになったのである。特に、若年女性労働力に対する選別的な需要が見られる。このような世界経済への第三世界の女性労働力の統合は、フォーマル・セクター、インフォーマル・セクターそれぞれの局面で起きているが、いずれにせよその背後には、文化的な背景や性差別、人種問題等、様々な問題が錯綜して存在していることは明らかである。

その種々の問題点は、最近様々に指摘されているが、概ね次のようにまとめることができるだろう。

- ① 周辺部、いわゆるオフ・ショアにおける女性の労働力は、労働集約的生産過程における《半熟練・未熟練》現業労働力として集中的に充当されているため、女性が技術的熟練度のヒエラルキーに参入することを困難にする。また、経営・管理といった事務の諸部門へのセクター移動もない。つまり、本来多様な労働力が世界的企業組織へ統合されることにより、性別セグリゲーションや職業セグリゲーションが生まれ、それらが重層的ヒエラルキーの内に固定化されてしまうことになる。また、この国際的ヒエラルキーの末端には、国際的下請性による家族労働や、家内作業場における賃作業があることも忘れてはならない。
- ② これらの女性労働力は、その他の労働力と比べ、景気変動のバッファー(緩衝装置)として扱われる割合が高い。最近の女性労働者は、景気後退期などに失業しても非労働力化せず、労働予備軍化、あるいはセミ・プロレタリアート化して市場の他地域へ拡散・移転していく動向を示している。要するに女性労働力は重層的ヒエラルキーの末端に固定化されるだけでなく、その外部に押しやられる危険性を孕んでいるのだ。
- ③ 第三の問題は、労働力の空間移動に関わっている。オフ・ショアにおける安価な労働市場の確立は、たいてい農村から都市部への膨大な労働力移動を伴っている。これらの労働力が、農村・生活維持経済から都市・貨幣経済へと吸引されることにより、生活維持経済の困難化が引き起こされる。また、労働力の側から見れば、いったん賃金に依存する生活に引き入れられたのち、仮に突如現金収入の手段を失っても生存経済への帰還が困難になるわけで、女性の産業予備軍化・セミ・プロレタリアート化は、都市部におけるインフォーマル・セクターでの様々な就労の肥大化、あるいは労働力の国際的移動というかたちで現れている。
- ④ 女性労働力が限り無くセミ・プロレタリアートに近いという問題点には、家父長制という、資本制とは別の制度が絡んでいる。ヴェロニカ・ヴィーティ

の主張によると、高度資本主義社会にあっても、農村周辺部や低開発国におけるのと同様に、女性に対しては資本が労働力の価値以下の賃金しか支払っていない。というのは、社会が結婚している男女を連結所得基準の単位とし、そのうち男性ひとりのみを生計維持者とみなしているため、資本が労働力の再生産費用の一部を女性たちに対して払わずに済ましているからである⁽⁶⁾。つまり、周辺部の労働力が都市部に移動してきても、解体下の生存維持経済が内部化していた労働力再生産維持機能は、都市部において代替・再生させられるに過ぎない。ヴィーチィは女性労働力のセミ・プロレタリアート化という現象に資本制生産（資本—賃労働関係）と家父長制の結節点を見ているが、その分析の射程には、女性とともに「経済学批判の盲点をなす⁽⁷⁾」と言われる第三世界・外国人労働者の問題も含まれている。ここでも有色人女性は複数の問題の結節点に立っているのである。

このように見てくると、《労働力の女性化》という現象は、NIDLによって注目を浴びている有色人女性にとってですら、社会参加と就業機会の増大などという喜ばしい事態では決してないことがわかる。問題は家父長制に代表される文化や社会制度、人種的問題などが絡み合った、外見以上に複雑で組織だったものである。いずれにせよ女性は、新たな労働市場で再統合されてもなお、特殊な規定性を帯びた労働力として位置づけられているのである。しかも、〈有給職場〉における女性の立場をさらに考察していくと、労働市場の再統合と〈女性化〉のターゲットはなにも女性とは限らず、その影響はさらに大きいことがわかってくる。

4. ホームワーク・エコノミー

ヴィーチィは、女性労働力のセミ・プロレタリアート化が、オフ・ショア

(6) 同上, 14 頁。

(7) C.v. ヴェールホーフ『家事労働と資本主義』丸山真人編訳, 岩波書店, 1986, 145 頁。

における現業労働の現場のみならず、資本制の中心部にあたる高度資本主義社会においても起きていると主張した。例えばシリコン・バレーのような全米エレクトロニクス産業の中心地に関しても、性別および人種別にひかれた線によって労働者の職種ないしランクが截然と区別されているという事実が指摘されている⁽⁸⁾。が、経済のサービス化による《労働力の女性化》によって、これらのセグリゲーションも流動化していく傾向にあるのではないか、「ホームワーク・エコノミー」が問題にするのは主にこの点である。

「ホームワーク・エコノミー」という用語は、シリコン・ヴァレー・ワークショップ・グループの1983年度大会発表におけるリチャード・ゴードンの定義に拠っている。ゴードンは、労働市場の世界的規模の流動化と変質の状況を「ホームワーク・エコノミー」と呼んだ。もちろんそこにはエレクトロニクス産業との関連で浮かび上がる文字どおりの家庭内職^{ホームワーク}＝家庭内仕事現象の意味が含まれているが、実際には彼がこの造語に到達したのは、以前なら女性にしかできないとされた仕事があるけれども、それと同じ特徴を広義に含む仕事を再解釈したら、まさにこの名で呼べないかと発想したためである。ハラウェイはゴードンの用語にさらに《労働力の女性化》という文脈を付与し、「ホームワーク・エコノミー」のもとでは労働は、——主体が男性だろうが女性だろうがおかまいなしに——文字どおり女性的なものであると同時に女性化されたものとして再定義されつつある、と指摘する。

テクノロジーの発展——複雑な生産過程の比較的単純な単位行程への分割や、生産の立地と管理の地理的距離の制約からの解放など——によって、労働形態はずっと多様化するようになった。単純作業がかつて特別免除を受けた労働者に対しても新たに適応されるようになったり、高度な技術を要する新たな分野が現れたり、男女を問わず、かつて技術職を免除されていた者全員に対して、その技術が求められ始めている⁽⁷²⁾ [190]。この[労働形態の

(8) 森田桐郎・木前利秋「同上」8頁。

多様化]は、新しいテクノロジーが可能にする内職的家庭内工場や、家庭内事業、在宅勤務^{テレコミュニケーション}やエレクトロニクス・コテージの出現といった面にも現れている。つまり、労働や通勤の形態がある種のフレキシビリティを帯びるようになったのである。それがフルタイム型労働からパートタイム型労働の転換を容易にし、いわゆる主婦労働力の自発的フレキシビリティの活用と、企業の利害による「雇用のフレキシビリティ戦略」とが相まって、多大な労働力リザーブを可能とする〔労働市場の流動化〕を招くようになったと言われている。

また、経済のサービス化による労働市場の変化も見逃せない。従来の主力・伝統的製造業が衰退し、脱工業化の過程が進行するにつれ、高度な生産者サービスが拡大されることになる。そして人的サービスの重要性が増し、営利活動として社会的に組織されるようになる。ところがこれらの人的サービスは、往々にして多様な形態の人間の再生産労働に係わっているため、それらが営利活動化される過程で、「主婦の仕事の焼き直し」ともいべき多様な低賃金職種が生まれ、ジェンダー・バイアスによる新たなセグメンテーションが形成される⁽⁹⁾。このような状況を、アメリカのフェミニストたちは、私的な家父長制から公的な家父長制への変遷でもありと見ている。特にサービス・セクターや労働力の再生産労働に係わるかぎり、女性は労働者というより奉仕者として見なされ、その労働価値以下の賃金しか支払われない可能性が高い。

そして、これら〔労働形態の変化〕や〔労働市場の流動化〕の荒波を被るのは、前述のとおり女性ばかりではない。新国際分業や資本のリストラクチャリングによって職を失うのは、有色人女性のライバルである男性プロレタリアートや、もしくは旧世代の男性たちかもしれないのだ。ハラウェイに言わせれば、女性化された労働とは、「構造的不完全就業状況」とほぼ同義である(75) [191]。つまり、広義の意味での《労働力の女性化》は、女性が《賃労

(9) 竹中恵美子・久場子編『労働力の女性化』有斐閣、1994、298頁。

《働本隊化》する一方でおこる賃労働の風化あるいは《疑似一主婦化》、また高給雇用の集中と大量の労働者階級の低賃金職種への転化および失業の可能性等々の広範な現象を名づけて言う概念なのである。彼女は言う。「女性化されるということは、はなはだ虐待されやすくなるということだ。それは予備労働力として解体され再構築され、ひいては搾取される可能性を孕む(72) [190]。」

このような状況下での再生産労働は、公的な家父長制に組み込まれる一方で、女性のM型労働に見られるように再私化されたりもする。もとより家父長制には、資本制生産様式の次元にはとどまらない契機があるが、さらに男女関係はといえば、家父長制の次元でも捉えられない局面を持っている。ハラウェイは、アメリカの黒人女性は「黒人男性が構造的不完全就業状況に突き落とされればどういう事態になるかということ、ずいぶん前から知悉していた(72) [191]」というが、はたして「ホームワーク・エコノミー」における家族および男女関係は、どのように形態を変えていくのだろうか。いまや自分たちこそが家族のための現金を運ぶ最大の資源となった有色人女性たちは、土地の所有が次第に困難になっていくにつれ、どのような「家庭」を持つのだろうか。「ホームワーク・エコノミーの家族」において、われわれは新たな家族のかたちを意志的に創造していくことができるだろうか。あるいはハラウェイが多少悲観的に想像するように、男女が新しい家族関係のヴィジョンを形成できぬまま、「家族」あるいは「家庭」という形態からやがて男女のどちらかが逃走するような事態を、果たして本当に招くことになるのだろうか。

「ホームワーク・エコノミー」という用語を使ってハラウェイが指摘しようとしているのは、工場・家庭・市場がそろって新しい規模の労働システムの中に統合され、女性の立場が重要になってきたという事実以上に、そこに生起する新たな男女関係の意味を探りつつ、この状況を分析することの重要性なのである。この《労働力の女性化》という問題は、フェミニスト・サイエンスの可能性をめぐる探究の一側面にしかすぎないが、資本制と家父長制の

結節点をなすだけに、重大な意義を持っている。特に家父長制の再編成には、より多くの問題提起がなされなければならない。いずれにせよ、「これからはいままで以上に多くの女性や男性が同種の状況を闘うだろう。(76) [191]」とハラウェイは言う。人種・性差・階級にわたって、新たな統一体をめぐる基盤が生まれたことには、期待を寄せてよいかも知れない。が、多くの差異の境界線を縦横に横断して起こるこの状況変化が、それらの境界を一見溶解せしめるように見えて実は再固定化するにすぎないのであれば、ハラウェイの言うように、「性差横断し、人種同盟していくことこそ、たとえ愉快でなくとも必要な条件となる(76) [191]」ことは確かだろう。

5. 分裂・融合するサイボーグ主体

ハラウェイが、集積回路上の七つの空間を挙げているのは、新たなるテクノロジーによって媒介され促進される社会関係が、それぞれたがいに包含しあっているこれらの空間にいかなるインパクトをもたらすかを示し、サバイバルのための分析と実践の方法を模索するためである。彼女の指摘する代表的な変化の状況をいくつか挙げてみよう。

〈家庭〉：家庭内事業、在宅勤務等の出現

：「ホームワーク・エコノミーの家族」の出現

〈市場〉：既成のマスマーケットに依存しない非公式な市場が増大し、購買力が多層化する。

：国家間の競争レースのための消費活動が高まる

：人間経験の経済的抽象（商品化）が強化される

〈有給職場〉：労働者階級の国際的再編成

：大半の労働が「周縁的」となり「女性化」される

：定職の経験も見込みもなく貯蓄もない人々が世界的に増加

〈国家〉：社会保障制度の崩壊が続行する

：監視と管理の増長に伴う脱中心化が起こる

〈学校〉：科学を母胎にする多国籍企業が教育（特に高等教育）の経営

管理に赴く

：反科学的・神秘主義的カルトへの関心が高まる

〈医院・病院〉：健康を国家の責任にする闘争が激化する

：個人的な肉体経験を伝える様々な一般的メタファーが再検討される

：女性自身による生殖＝再生産関係のコントロール，未だ実現ならず

〈教会〉：政治闘争における精神性は，性と健康の問題とにからんで，
なおも妥当性を失わずにいる

ところが彼女は，これらの変化の特徴を列挙した後で，その相関を探る分析の困難さをあっさりと認めてしまう。まるで，われわれが経験している変化のダイナミズムを理論によって構築することを，ほとんど放棄してしまっているかのようである。彼女は言う。

科学とテクノロジーの社会関係にからんで世界中で経験されている圧制は苛烈をきわめている。けれども人々が何を経験しているのかは，いまひとつ判然とない。わたしたちにしても，経験に関する有力な理論を集合的に構築しなければならないというのに，そのために役立つ手がかりが，いまひとつ欠落しているのだ。マルクス主義，精神分析，フェミニズム，人類学……あらゆる方面からわたしたちの経験を明確化しようとする努力が重ねられてきたものの，その結果は，どうも伸び悩んでいるのである(90) [196]。」

実はこの焦燥感の背後には，経験を語るための方法論に対する彼女の深い懐疑が横たわっている。マルクス主義や精神分析やフェミニズムといった理論が，これまで集合的に補完しあって理論を構築してきたというより，理論の統一性を追求するあまり互いを排除してきたという認識があるからである。理論構築の必要性を認識しつつも，その統一性への志向は拒否したいと

いうハラウェイのジレンマがここに現れているとも言えよう。しかし、と彼女は問う。経験を集合的に語るのに、全体性や統一性を前提とする必要があるだろうか。

われわれは、確かに科学とテクノロジーを対象とした社会主義フェミニズムの政治学を切望してはいるが、その際「単一の主体が自己確認できるもの」と考えるような立脚点は捨てなければならない(82) [194]。」あるのは自己確認ならぬ主体分散、そして言わば国外離散^{ディアスポラ}の状態である。そのような状況でいかに生き抜くか、それがわれわれの勤めである、と彼女は言う。サイボーグ・ポリティクスにおけるありうべき主体を、ハラウェイは〈サイボーグ主体〉と呼ぶ。自然化された母系や源始の全体性神話とは無縁のこの主体意識は、単一の立脚点を必要としない。それに対して「フェミニズム諸派とマルクス主義諸派は、革命的主体を構築しなくてはならないという西欧的な認識論的要請にこだわるあまり、その上に座礁してしまった。その所以は、彼らの支点というのが、あくまでも抑圧の階層秩序を中心とするか、そして／もしくは倫理的優越・無垢・自然への接近という潜在的立場を中心とするか、その一方／双方であったせいだ。(99) [200]」

統一性の分裂に、当惑を覚える向きが多いことは、ハラウェイも認めている。しかし、サイボーグ・ポリティクスとは、むしろ分散と融合の美学である。サイボーグ主体は同一性^{アイデンティティ}より類縁性^{アフィニティ}、統一性より多様性を志向する。関係性は熱望するが、全体論には警戒する。統一戦線は受け入れるが、主導的党派を必要とはしない。「融合によって、男性やら女性やらというカテゴリーは疑わしいものとなり、欲望の構造、すなわち言語と性差を発生させるよう仕組まれた効果は粉碎され(98) [199]」る。また、分裂のなかからいかに多くの快樂や経験、そして権力が生まれてきたのか、しかもそれらがいかにゲームのルール変更さえ実現しかねない可能性を秘めているか——その点を精密に理解することこそ真に求められている、というのがサイボーグ・ポリティクスの主張なのである。

そもそも、ハラウェイの考える支配の情報工学とは、「弱者のためのサバイ

バル・ネットワークをどれひとつ完成させないものである(88) [196]。テクノロジーによって媒介される社会関係のネットワーク内部には、「いささかも女性のための「場所」は確保されていない、単に、女性のサイボーグ主体には不可欠な差異と矛盾の幾何学がみられるばかりである(82) [194]。」この差異と矛盾の幾何学を学び、権力網や社会生活網の読み方を知ることが、きたるべき連帯や組合せについて学ぶ道なのである。

6. サイボーグ・ジェンダー

統一的理論に対するハラウェイの懐疑の根は深い。フェミニズム理論として見た「サイボーグ宣言」も、従来のフェミニズムに対する批判から始まっていると言っても過言ではない。フェミニズムの歴史は、あたかもイデオロギーをめぐる各派の長期闘争のごとき様相を呈している。とりわけ、女性の一般経験からの逸脱が起こった場合にそれを監視するようなフェミニズム分類学を、ハラウェイは否定する。いかにして分類学的同定に頼らずに、詩的で政治的な理念を構築するか、それがサイボーグ・ポリティクスの課題であるとハラウェイは考えている。

そもそもフェミニズムは、「西欧的人間像」をひとつの「物語」にしてしまう点において、ポストモダンと深く通底した精神である。それは、家父長制・植民地主義・ヒューマニズム・実証主義・本質主義その他なくもがなの大義名分を破壊しながら、それと同時に、代替案としての有機的立脚点に対してさえ疑問符をつきつけるような、アイロニカルな闘争である。従ってフェミニズム諸派も、結局自らの認識論的戦略を抜本的に見直してはじめて、ありべき理念構想へ向かう必要条件を満たすことになる。

肉体がいかに歴史的に構成されたものであるか、フェミニストたちは痛感してはいるが、なによりも「女性」というカテゴリー自体が無垢ならざるものであることを認識せねばならない。その点において、ガイノクリティクスやガイネーシスといった従来のフェミニズムは批判されるべきだ、というのがハラウェイの考えである。

例えばガイノクリティクスは、「女性理念」といった一般化に頼らずに、女性の経験を歴史的・個別的に記述することを目指してはいるが、サブ・カルチャーとしての枠組みを与えられた「女性の文化」は、実は親和力を誘導する言説機構によって人工的に産出されている、とハラウェイは言う。しかもガイノクリティクス派がその課題とする女性による文学史の分析や修正は、分析者の性差に関わる問題を残したままである。

一方ラディカル・フェミニズムが前提とする女性の非在性の主張も、「西欧的な書き手であるかぎり、彼／彼女が他者を取り込もうとしたら、他には有り得なかった(57) [184]」手段ではあるかも知れないが、やはりそこにはあらかじめ全体化志向が組み込まれているがゆえに、まさにそれが「女性理念」という目的を成就しようとする。そのような批評は、性の一方を指示対象にする構図から逃れることはできない。

ハラウェイが最も手厳しく批判するのは、クリステヴァに代表される精神分析の応用や普遍化の傾向である。彼女の考えでは、それらは社会関係における女性像を分析困難にするばかりか、性差形成や性差社会の諸側面を説明したり認識したりすることさえひどく困難にしてしまう。系譜学確立を目論むこれらの政治的分類のなかでは、歴史と多様性は結局消滅せざるを得なくなってしまう。

それに対し、サイボーグ・フェミニズムが主張するのは、もはや統一的な母型があったなどとは前提にはいけないこと、そしていかなる構築も完全ではありえないということである。そこで登場するのが〈サイボーグ・ジェンダー〉という概念だ。これは、後のサイバーパンクに影響を与えたと言われる70年代のフェミニストSFから発想を得ており、機械と人間のハイブリッドやキメラたちが多く活躍するのがそれらの作品の特徴である。ハラウェイが着目したのは、そこに登場するサイボーグたちが、サイボーグであるにも係わらず、否、まさにサイボーグであるが故にジェンダーを持つというアイロニーと、それがジェンダーを決定するポリティクスを逆照射するという事実である。彼らのジェンダーは、性差を発生させるものとその効果、

言わば性差のサイバネティクスを判じ絵のように炙り出してゆく。ジェンダーを持ったサイボーグは、否定の論理から抽出された有色人女性の姉妹たちだ。女性はみんなサイボーグ・ジェンダーを持つ、とハラウェイは言う。その意味するところは、「^{セックス}性という自然」を「ジェンダーという文化」で再定義しようとしても、あるいは「ジェンダーという文化」の根源に「^{セックス}性という自然」を見ようとしても、それらの営為は言説の政治的・歴史的 성격に左右されてきたということ、つまり、性もまたジェンダーという概念を派生させた要因、ジェンダーという言説によって逆に操作される概念的効果だということである。性差の根源を現前化させることは極めて困難である。ジェンダーの歴史性やフェミニテの否定性を持ち出して女性としての認識論体系を構築しようとするほどに、むしろアイデンティティ確定の限界が浮上りてきてしまい、捨て去ったはずの自然主義的な諸価値の束が執拗に回帰してくる。であれば、性差の根源の非＝現前性をあくまで自覚し、ジェンダーに関する言説の物語性を認識することにより、われわれが真に望むポスト・ジェンダーの行方がより明確に見えてくるのではないか、それがサイボーグ・フェミニズムの目論見である。このデコンストラクティブな作業は、「女性性」にこだわっていた80年代までのフェミニズムとは一線を画するものである。

90年代に入って、セクシュアリティに関する言説は、思索的・視覚的な面を強めつつある。また、同性愛やマスターベーションといった多様な性的快楽のかたちもより許容されるようになり、性器の摩擦以外に、個々の器官による性刺激コミュニケーションに対する関心度も高まっている。このサイボーグ羨望というかたちの肉体性の捨象は、セクシャリティにおける文化的文脈の重要性を自覚し始めたこれら90年代特有の位相と、深く通底するものである。それは、物事の単純化などでは決してなく、危険を犯してでも無限の差異の中に突入するという厄介な仕事をひきうけること、自分の肉体という道具と神話の関係について知ることなのである。

7. まとめ

「サイボーグ宣言」を批判するのはたやすい。社会主義という視点が明確ではないとか、具体的な行動の指針を先送りしているといった批判は、どれも的を得た指摘である。それでもなお、なぜこの「宣言」がわれわれに衝撃を与え、サイボーグ・ジェンダー、サイボーグ主体といった概念がこれほどにわれわれの想像力を刺激するのかは、考えてみる必要があるだろう。

まず、しばしば誤解されているように、「サイボーグ宣言」は「現実の情報テクノロジーがもつ巨大な暗部を隠蔽⁽¹⁰⁾」するようなテクノロジー礼讃の書ではない。むしろほとんどペシミスティックとさえ呼び得るような警告の書である。しかし、ハラウェイ自身の言にあるように、サイボーグのイメージが示すのは、二元論の迷路から抜け出る道についてのひとつ夢である。そこにはディストピアを通り抜けてユートピアを垣間見ようとする力、ペシニズムを突き抜けた、サバイバルのための強い意志がある。ラディカルズム全般の退潮のなかにあって、この強靱な意志はフェミニズムを牽引する力に満ちていると言わざるを得ない。ハラウェイの強さは、意識の問題であるとともに、生死を賭けた問題があるということを経験している点である。「サイボーグ宣言」の魅力と独自性は、それが「政治的想像力」を柱とした「修辭的戦略」であることを自ら謳っていることだ。現実を変えていくためには、ポスト・ヒューマン、ポスト・ジェンダーといった将来を希求する想像力が、何よりも必要なものなのかもしれないのだ。

(10) 西垣通『ペシミスティック・サイボーグ』青土社、1994、298頁。